

[国 語]

入門期における、読みを深めるための効果的な指導法について

- 1年「じどう車くらべ」における実践・3つの観点を中心に -

入澤亜由美*

1 はじめに

(1) 読み取ることの現状と、求めたい読解力について

図書室から本を借りては嬉しそうに読む児童、読み聞かせをつぶやきながら楽しむ児童が多い。「お話を読むことは楽しい」という感覚を多くの児童はもっている。教科書教材についても、登場人物の気持ちを想像し、吹き出しに書き込んで楽しむ活動に積極的に取り組んでいる。

しかし、楽しく読むことの一方で、なんとなく理解した気にさせてしまう授業をしてしまったのではないかと反省することも多い。例えば叙述に即さない勝手読みをしたり、初めて出会った文章の意味を捉えることができなかつたりすると、そのように感じる。まずは正しく読み取る力が必要であり、それは国語に限らずすべての学習において必要な力だといえる。

新学習指導要領では、学んだことを主体的に探究し、実生活に生かす姿を目指すことが強調された。主体的になるには、楽しく学ぶことが鍵となる。また学んだことを実生活に生かしていくには、正しく読み取り、深く理解することが求められる。深く理解することは、正しく読み取ったことを違う場面でも生かせること、自身の経験と結び付けて表現できることだといえる。

私の求める読解力とは「正しく文章を読み取ること。」「文章の意味を深く読み取り、推論し味わうこと。」「文章の意味を読み取り、自分の考えをもって表現すること。」である。楽しく読むことを通して「確かな読解力」につなげるために、より有効な指導法を考えたい。そこでまず、「読解力」について文献をもとにまとめ、整理したい。

(2) PISA型読解力

「読解」を辞書で引くと「文章を読み、その内容を理解すること¹⁾」と記載されている。

ここで教育に関する「読解力」について、PISA調査結果を受けて注目されている「読解力」に着目したい。PISA調査における「読解力」については、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力²⁾」と示されている。PISA型「読解力」は、これまで日本の国語教育等で行われてきた「読むこと」の意味で用いられてきた読解力とは異なった定義である。また、PISA型「読解力」の調査は、以下の3つの側面に分けて測定されたという³⁾。

情報の取り出し・・・テキストに書かれている情報を正確に取り出すこと。

テキストの解釈・・・書かれた情報がどのような意味を持つのかを理解したり推論したりすること。

熟考と評価・・・テキストに書かれていることを生徒の知識や考え方や経験と結び付けること。

つまり、文章に書いてあることを正確に読み取るだけでなく、その情報を使うことや、さらに活用し、すでにもっている知識や自分の経験に結び付けることができるかどうかを測定したのだった。それは辞書にある「読解」の意味を超えて、「生きる力」に通じる観点だといえることができる。この観点は私が求める読解力とつながるものと考え、以下で詳しく取り上げる。

* 刈羽村立刈羽小学校

(3) PISA型「読解力」をつけるための3つの観点

松野孝雄は、PISA型の問題を解くために具体的にどのような力を必要としているかを図1のようにまとめている⁴。以下では3つそれぞれの概略をまとめる⁵。

「1 指摘（情報の取り出し）」は、教師が発問し、児童にテキスト内から発問に適合する情報を指摘させる学習である。PISAのテストでは文章に限らず、表やグラフなどの「非連続型テキスト」からも指摘する問題が出題されているが、小学校低学年においては、文章や挿絵からの「指摘」が「読解力」の基礎となる。

「2 変換（テキストの解釈）」は、「テキストを違う様式などに変えて表現すること」と定義される。授業の中で行われる様々な学習は「変換」をもとにしている。様々な「変換」があるが、「変換」で中心となるのは書く活動である。そして、「テキスト内の情報がある観点から組みかえて表現する」ことが、「変換」することで促されるという。

「3 理由付け（熟考と評価）」は、「問題について、自分で判断し、その理由を述べること」である。1, 2がテキスト内の情報を主として扱っているのに対し、自身の知識や経験に基づいた判断が要求される。その判断には、理由が求められるために、理由付けが大切となる。

以上のように「読解力」を向上させる学習の3つの観点が示されている。

- | | |
|---|-------------|
| 1 | 指摘（情報の取り出し） |
| 2 | 変換（テキストの解釈） |
| 3 | 理由付け（熟考と評価） |

【図1 3つの観点】

この3つの観点は、実際の授業を想定してまとめられたもので、実践的な指摘だといえる。この観点を参考に自身の授業を構成することで、手立てをより具体的に示すことができ、読みを深めることができるのではないかと考える。この3つの観点に基づいた手立てが有効であるか、考察したい。

2 研究の目的

「読解力」をつけるために3つの観点「指摘」「変換」「理由付け」に基づいた手立てが有効であるか考察し、検証する。

3 研究の内容

(1) 単元名 くらべてよもう「じどう車くらべ」 光村図書 1年上（平成20年 1年生：22名）

(2) 単元の目標

◎自動車の「しごと」と「つくり」の關係に興味をもって読むことができる。（読むこと）

○「しごと」と「つくり」という視点をもち、ほかの自動車を説明する文章を書くことができる。（書くこと）

(3) 指導計画（全9時間）

次	時	学習活動	◆支援・☆評価
第1次	1	◎「じどう車ずかん」を作ることを理解する。	◆図鑑を作って自分が知っている自動車を紹介する活動だということを知らせ、学習の意欲を喚起する。 ☆知っている自動車について、話をするができる。（発言）
	2	◎自動車の「しごと」と「つくり」について読み取っていくことを知り、学習の見通しをもつ。 〈指摘〉	◆いろいろな読み方（交互読み、列やグループによる分担読みなど）で音読し、内容を大まかに理解するとともに、「問い」と「答え」の關係に気付くことができるようにする。 ☆「しごと」と「つくり」に分けられていることを理解している。 （ワークシート）
第2次	3	◎バスと乗用車の「しごと」と「つくり」を読み取る。 〈指摘〉〈変換〉	◆「そのために」という言葉に注目させ、それぞれのまとまりをつないでいることを理解させる。 ◆絵を見て、バスや乗用車の特徴に気付き、本文と関連づけて理解できるようにする。 ☆バスと乗用車の「しごと」と「つくり」を理解している。 （発言、観察、カード）
	4	◎トラックの「しごと」と「つくり」を読み取る。 〈指摘〉〈変換〉	◆絵を見て、トラックの特徴に気付き、本文と関連づけて理解できるようにする。 ☆トラックの「しごと」と「つくり」を理解している。 （発言、観察、カード）

	5	◎クレーン車の「しごと」と「つくり」を読み取る。 〈指摘〉〈変換〉	◆絵を見て、クレーン車の特徴に気付き、本文と関連づけて理解できるようにする。 ☆クレーン車の「しごと」と「つくり」を理解している。 (発言、観察、カード)
第3次	6	◎はしご車の「しごと」と「つくり」を調べ、図鑑カードに書く。 〈変換〉	◆教科書の絵に注目させ、「しごと」と「つくり」を予想できるようにする。 ☆はしご車の「しごと」と「つくり」を自分なりに資料から読み取り、書くことができる。(発言、観察、カード)
	7 8	◎絵本や図鑑などから好きな自動車を選び、「しごと」と「つくり」について書き、図鑑を作る。 〈理由付け〉	◆教科書の文章を参考にして、説明する部分を書かせる。ヒントカードを用意しておく。 ☆好きな自動車を選び、「しごと」と「つくり」を文章にまとめることができる。(カード)
	9	◎書いたものをお互いに発表し合う。 〈理由付け〉	◆友達が作った図鑑を読み、いいと思ったところを伝え合うことができるよう、カードを用意する。 ☆友達の図鑑のいいところを、自分なりに見つけることができる。 (発言、カード)

(4) 授業展開

① 教材の特性

「じどう車くらべ」は、自動車を取り上げた説明文である。教科書に出てくる車の説明部分を学習した後、自分の好きな自動車について調べ、まとめ、最終的には「じどう車ずかん」を作る。初めての説明文「いろいろなくちばし」では、説明文の基本パターンである「問い→答え」と、その文型を学んだ。本教材では、「話題・問題提起→問題に対する説明」を、自動車の「しごと」と「つくり」という二つの事柄の因果関係で述べる形をとっている。バスや乗用車、トラック、クレーン車の説明部分では、どの自動車についても「どんなしごとをしているのか」を述べた後、「そのために」という接続詞でつなぎ、「どんなつくりになっているのか」が述べられている。

② 授業の実際

松野孝雄が指摘した、「読解力」向上に向けての3つの観点をもとに、取組を整理する。

ア 指摘（情報の取り出し）

〈絵、文章から内容を指摘する〉

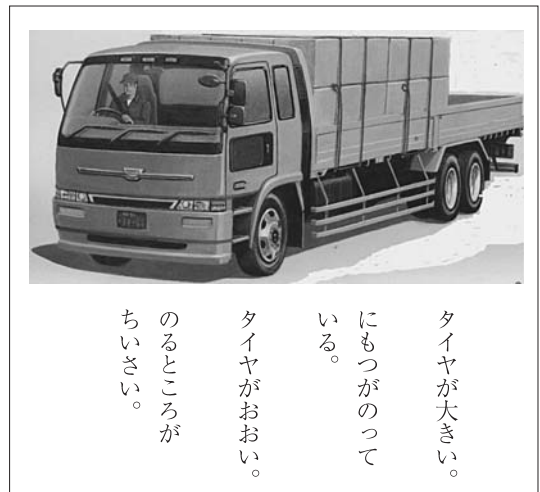
低学年にとって挿絵は文章を理解する上での手掛かりとなり、それを参考にすることで文章の理解が容易になる。図2のような教科書の挿絵やいろいろな自動車の絵や写真を用意したところ、「乗用車とバスの似ているところがある。」「家の自動車と違う。」など、興味をもっていた。

トラックの前時で学習したバス・乗用車との比較を、挿絵を使って発問したところ、「大きな窓がバスにはあった。トラックにはない。」「トラックに乗っているのは一人だけど、バスにはたくさん乗っている。」「バスには大きな荷物をたくさん乗せるところはなかった。」など、絵を頼りに気付きを発表していた。

また、文章ではどう書いてあるか、絵から十分に情報を取り出した後で本文に戻った。「うんてんせきのほかは、ひろいにだになっています。」と本文にあるが、「さっき見つけたことが書いてある。」などというように、絵を見て気付いたことが本文にも書いてあると気付くことができた。

〈文章のパターンに気付かせる〉

本文は、その自動車が「どんなしごとをしているのか」を述べた後、「そのために」という接続詞でつなぎ、「どんなつくりになっているのか」を述べる構成となっている。繰り返しのパターンで、違う自動車について述べられているため、構成を押さえることが重要である。そのために、「しごと」と「つくり」に分かれている同じパターンのワークシート（図3）を用意し、本文から情報をまとめる手掛かりにした。また、本文で「しごと」と「つくり」を表す部分を捉えやすくするために、教科書に線を引くときに色分けをした。「しごと」には赤、「つくり」には青い線



【図2 挿絵を見た児童の気付き】

を引くように色を変えることで、視覚的に構成を表した。

書くことに抵抗感がある児童が何人かいたので、ワークシートは、マス目を入れたものも用意した。マス目があると、教科書から探し出すときに予想をつけやすくなり、書くことに対する意欲や自信を失わずに学習を進めることが可能になる。

また、同じパターンのワークシートを自分の自動車図鑑を作る際にも使った。「救急車の仕事は病気の人を助ける仕事。」「だから、車の中に病院の機械を乗せる場所がある。」というように「しごと」と「つくり」に注目しやすくなる。

イ 変換（テキストの解釈）

〈自動車の「しごと」と「つくり」を動作化する。〉

本文に書かれていることを言い換える、もしくは置き換える学習活動を、はじめは取り入れずに、本文を視写することを中心に授業を進めようとした。しかし、理解があまり深まらず、変換の大切さを感じた。文字で表現することより、体を使って表現することが好きな児童だったので、動作化を取り入れた。

トラックの例を取り上げる。「トラックの仕事はなんですか」と問いかけ、「荷物を運ぶ仕事。」と、児童が答える。このように、本文から分かることを発問し、答えさせ、「では黒板の前に台がありますが、どのくらい乗せられるかな。みんなが荷物になって乗ってみよう。」と指示した。すると全員は乗り切れない。「たくさん乗せるにはどうしたらいいですか。」と問いかけると、「荷物を乗せるところが大きくなればいい。」という反応がある。もう一つ台を出すと、全員が乗れた。本文に「ひろいにだい」と記載されている部分を実感する場面になった。

〈はしご車の「しごと」と「つくり」をまとめる。〉

本文にはバス・乗用車、トラック、クレーン車の説明がある。そして最後に、はしご車について「どんなしごとをしていますか。そのために、どんなつくりになっているのでしょうか。」と、問いかけている。はしご車の絵が教科書に載っており、そこから情報を指摘し、それまでに学習してきたパターンをもとにまとめる活動をする。

まず指摘の段階でやってきた挿絵からの読み取りをした。「はしごが高いところまでのびている。」「タイヤが大きい。」「タイヤの近くに足みたいなのがある。」というような気づきがあった。また、他の図鑑や資料も用意し、そこからも情報を取り出す活動を取り入れた。次の理由付けの活動にもつながることを意識させた。

ウ 理由付け（熟考と評価）

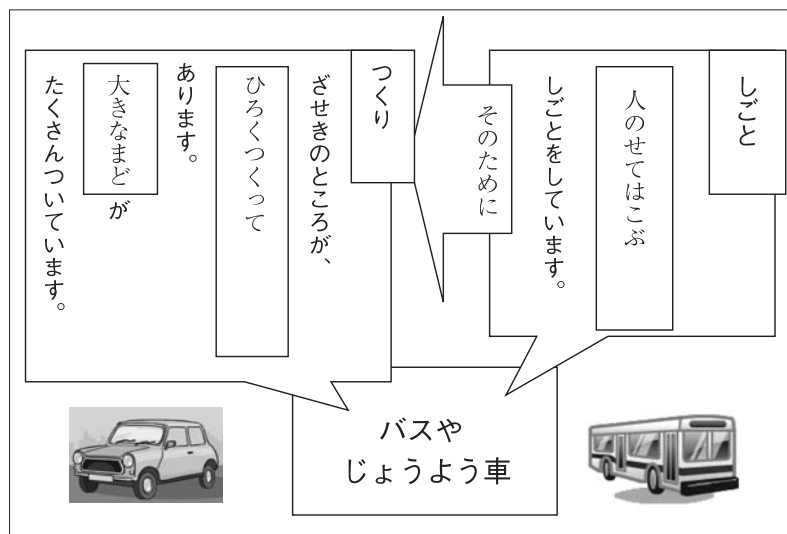
〈他の自動車の図鑑作りをする。〉

自分で学習した内容を基に、本文とは違うことばで語る活動として、自動車図鑑作りをした。

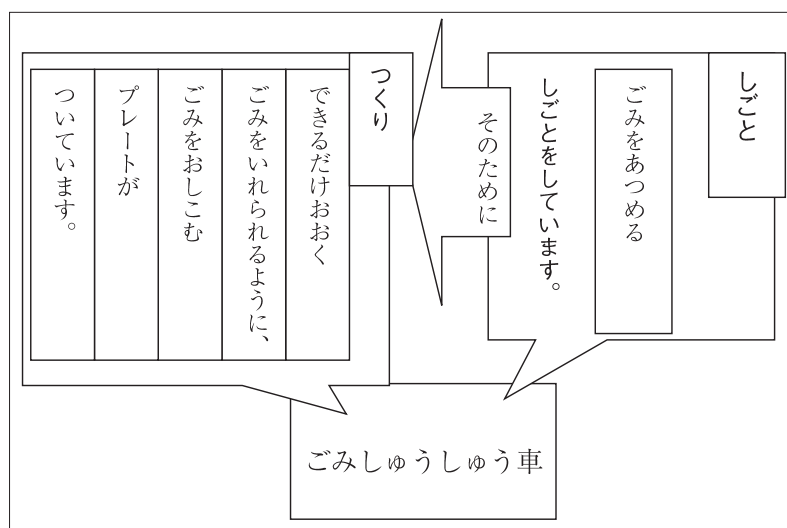
図4のように、同じパターンのワークシートを用意し、自分の好きな自動車を図鑑などで調べて書き込むようにした。そして、最後にまとめて図鑑になるようにした。

「しごと」と「つくり」を同じパターンで繰り返し学習してきたので、新しい課題に取り組みやすい様子だった。

早く終わった児童には絵を描くように指示し、詳しく書き込む様子が見られた。「しごと」と「つくり」がよく分かってい



【図3 ワークシート】



【図4 自動車図鑑の例】

なかった児童には、「どんなお仕事をしたいの?」「その仕事ができるように、他の車と違うのはどんなところ?」というように質問して、支援した。

図鑑や資料には、キーワードである「そのために」がない場合がほとんどだったので、まず、「しごと」は何かを捉えさせ、「その仕事ができるように、どんなつくり、かたちになっているのかな。」と問いかけるようにした。

4 考察

(1) 指摘（情報の取り出し）

挿絵には細かいところまで描かれていたので、子どもたちは様々な要素を取り出していた。しかし、いろいろな資料を示すと本文の内容以外のところに偏って注目することもあり、そればかりを追うようになりそうになった。例えば、トラックをいくつか示したところ、「ドアの模様が違う。」「色が違う。」というような部分にばかり注目する子どももいた。あまり多くの情報を与えると混乱させてしまう。どの資料を提示すれば、より混乱なく特徴を捉えられるか、指摘の段階では特に考慮する必要がある。単にたくさんの資料を提示することがいいとは限らないことが分かった。

また、授業をその混乱のまま進めるのではなく、より捉えさせたい内容に迫る発問をよく選ばなければならないと感じた。特に、いろいろな意見が出てきたときの切り返しの発問は筋から外れないために必要だと感じた。授業前に、出てくるであろう意見をできる限り予測していきたい。また、情報を取り出す場面では、既習の場面と比較させることで、より理解しやすくさせ、また取り出す際の目安にもなる。比較という視点も重要だと感じた。

また、ワークシートを穴埋め形式にし、同じパターンで進めることによって、構成を理解しやすくなるようにした。構成を理解することを、変換や理由付けの活動につなげるねらいもあった。特に書くことに抵抗感のある児童が、「ひろいにだい」「大きなまど」という部分を本文から探し出し、自分で書き込むことができた。

(2) 変換（テキストの解釈）

変換について、指摘の学習時に動作化を取り入れ、指摘と変換とを繰り返すような学習形態をとった。例えば、大きな窓だと、小さい窓よりも広く景色を眺めることができるから、バスや乗用車には大きな窓がついている、ということを実感させたい場面があった。教室の窓枠を使ったり、画用紙で大きい窓と小さい窓を作ったりして、どのくらい見える景色が違うのかを体感させた。そうすることで「そういうことか。」「なるほど。」という声があがった。このように、動作化は実感を伴って理解できる利点がある。こうした本文をもとにした動作化は、理解を深めるのに有効であり、また、その段階までよく分からなかった児童の理解を助ける要素も見受けられた。

動作化させるときには、「教科書にヒントがあるよ。」と本文に立ち返らせるようにした。本文に立ち返る場面を設定しないと、せっかくの実感はその場のみで終わってしまうと考えた。しかし、動作化に夢中になりすぎて、本文に落ち着いて戻ることが難しくなる場面があった。思いっきり動作化させたいが、子どもたちの様子を見てどこまで味わわせるかの加減が難しいと感じた。また、動作化は、今回は一斉に行った。一斉以外にもペアでやってみたり、グループを作ったり、多様な方法でできそうだった。

また変換の学習では動作化以外にも、絵を描いてみることもなども考えられる。こうした指摘と変換の繰り返しをして、読み取りを深めさせたい。

はしご車についてまとめる学習では、指摘で学習してきたパターンを頼りにしながら、絵や資料にある情報を、「しごと」と「つくり」に整理した。指摘の段階でパターンを押さえていたので、困難は少なかった。特に低学年ではパターンを学んでいくことが、変換や理由付けの段階で生かされることが分かった。

(3) 理由付け（熟考と評価）

今回はワークシートを同じ形式にし、他の資料を使っても書くことができることをねらいにしていた。同じ形式で統一したので、手掛かりとして前に書いたワークシートを見ながら書く児童もいた。救急車を調べた児童は「きゅうきゅう車はびょうきの人をたすけるしごとをしています。」「そのために、びょういんのきかいをのせるばしょがあります。」というように「しごと」と「つくり」に注目して調べていた。また、ポンプ車を取り上げた児童は「ポンプ車は水をくすしごとをしています。」「そのためにながいホースがついています。じょうぶなぬのでつくってあります。」とまとめていた。

教科書を読み取る段階では、本文を正しく読み取ることができるように、「指摘」と「変換」を繰り返した。まず正しく読み取り、文章の構成を理解することが基礎になる。その基礎を使って「理由付け」の学習をした。書くこと

を苦手とする児童が多く、混乱するかと心配もあったが、「しごと」と「つくり」という構造をたよりに学習を進めていた。

ただ、図鑑や資料には「そのために」というキーワードや「～のしごとをしています。」「～のつくりになっています。」という、探すときにヒントになることばが必ずしもあるわけではなかったために、うまく探し出せない児童もいた。個別に「どんな仕事をしているのかな？」と声をかけて指導したが、繰り返してやり、慣れていくということも力を育てる上で必要だと感じた。今回、もう少し時間を取って図鑑作りをすることができればよかった。

5 おわりに

より深く、より正確に読み取る力を育てる授業をしたい、という思いでこの実践に取り組んだ。松野孝雄の視点を参考にするのが、実践を整理・分析するのに参考になり、また同時に自身の課題を明らかにするのに効果的だった。ここでは研究を通して見えてきた課題についてまとめたい。

まず、資料を手掛かりに「指摘」する際に、教師側がしっかりと中心となる要素を導き出せるようにまとめることが大切であり、そのために発問を精選する必要がある。低学年は挿絵や写真を手掛かりにすることが多いと思うが、そこから何でも出すのがよし、ではなく、正しく指摘できるように発問を選ぶことが大切だと感じた。

「動作化」については、ただ単に体を動かしただけでは読みは深まらない、ということが分かった。読みが深まるように「本当にそうかな？」と確かめさせ、想像させるような発問が、「動作化」の効果を高める。「指摘」と同じように、発問を研究する必要があると感じた。

また今後やっていきたいこととして「ことば」に注目して追求していく活動を考えている。本文には「車たい」「ざせき」など、日頃あまりなじみのないようなことばも出てきた。児童はことばの意味を知ることにより、実際の様子が分かり、より深く内容を捉えていく。ことばに注目してこだわりながら読み取る活動は、豊かな言語活動にもつながり、また詳しく知りたいという態度を育てる。また、その活動は言い換えをするということで、「変換」をたくさん経験させることにもなる。「変換」をたくさん経験することは、「理由付け」をするときに基礎となる力だと考える。

児童が「もう終わりなの？続きがやりたい。」と言えるような授業をしたい。しかし、日ごろの授業を振り返ると、教師からの押しつけでだらだらとした授業になっていたのではないかという不安に駆られることもある。今後も研究し、実践を重ねることが必要だと感じている。今回手掛かりにした3つの観点を生かしながら、「読解力」がつく授業を目指して研究していきたい。

引用文献

¹ 松村明 編『大辞林 第二版』、三省堂、1999年

² 文部科学省「読解力向上プログラム」, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/014/005.htm

³ 国立教育政策研究所 編『生きるための知識と技能』ぎょうせい, p.30

⁴ 松野孝雄, 『「読解力」授業づくりへの挑戦 小学1－2年生』, 明治図書, 2008年, p.14

⁵ 同上, p.19-p.24

参考文献

八戸市立下長小学校『八戸発 PISA型「読解力」を育てる授業提案』, 東洋館出版社, 2008年

益地憲一 編著, 『小学校 国語科指導の研究』, 建帛社, 2002年

松野孝雄, 『「読解力」授業づくりへの挑戦 小学1－2年生』, 明治図書, 2008年

文部科学省「読解力向上プログラム」, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/014/005.htm